

# 植民地期朝鮮における日本人移住者の文学

## ——文学コミュニティの形成と「朝鮮色」「地方色」——

楠井 清文（立命館大学衣笠総合研究機構ポスドクトラルフェロー）

E-mail kkt27007@lt.ritsumei.ac.jp

### 要旨

近年「外地」と称された地域での日本語文学についての研究が盛んに行われている。しかし「外地」に在住した日本人の文学活動については、資料の未整理という要因もあって、未だ十分に解明されていない。本稿は、植民地期朝鮮で居住した日本人文学者の作品を取り上げる。特に朝鮮総督府図書館蔵書を継承した韓国国立中央図書館の所蔵資料に基づいて、彼らの文学の特徴について分析する。

### abstract

From 1895 to 1945, Japan had invaded its surrounding countries and colonized them, including Taiwan, Korea, Manchuria, and Micronesia. These areas were called gaichi (外地, foreign land). Over the past decade, studies on literatures written by Japanese in gaichi have developed. However a large number of studies have been made on famous authors, little is known about literary movements by Japanese emigrants. This paper is concerned with works by Japanese authors settled in Japan-ruled Korea. Especially I attempt to analyze into their literary features based on materials owned by the National Library of Korea that inherited the Library of the governor-general's office in Korea (Chosen Soutokufu).

### はじめに

筆者は2009年8月6日～20日、文部科学省グローバルCOEプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」（立命館大学）より「日本文化DH若手研究者海外研究活動助成金」2009（平成21年度）の助成を得て、韓国で「外地」日本語文学に関する資料調査を行った。本稿はその調査の成果の一部であり、主に韓国国立中央図書館の所蔵文献に基づき、1920年代から30年代にかけて韓国で活動していた日本人コミュニティの文学の様相を論じる。

### 1 研究テーマと課題

筆者の研究テーマは、「植民地期朝鮮における日本人の文学活動に関する研究」である。具体的な対象

としては、(1) 1910～1945年に朝鮮で日本語により出版された文学書・文学雑誌、(2) 日本語新聞・雑誌の文芸欄、(3) 韓国における日本語書籍の流通と所蔵、が挙げられる。これらは別個の対象でなく、植民地で日本語による文学がどのような社会的・文化的位置づけを持っていたかを、総合的に検討するためのものである。

植民地または占領地など、いわゆる「外地」において日本語で書かれた文学を「日本語文学」と総称するが、その内容は、黒川創によれば次の3者に大別される。「①植民地下の現地人作家が、日本語で書いた文学作品。②植民地およびそれに準ずる地域に居住している日本人作家の（日本語による）文学作品。③植民地などへの滞在は一時的だが、その経験が、作家の文学に深く根づいていると思われる（日本語の）文学作品」<sup>1</sup>。

ここで重要なのは、同じ「日本語」という表現手

段を用いたとしても、「現地人作家」と「日本人作家」とでは意識が異なることである。この点について黒川は、「日本語文学」とは「言葉の支配と被支配」という関係の中で成立した存在であり、各作品に即して「言葉のたたかいや葛藤」の痕跡を検討していくべきだとしている<sup>2</sup>。

以上のように「日本語文学」は他言語や他文化との緊張関係や相互影響の中で書かれた文学である。本稿で対象とするのは、朝鮮へ移住した日本人による文学だが、その場合も他文化への視点という分析軸を無視できない。自己を取り巻く環境をどのように日本語の枠内で形象化したか、という他文化への眼差しを文学作品から読み取ることが、ここでの課題となる。

## 2 日本語メディアの役割

では具体的に日本人移住者による文学（黒川前掲論文の②に該当する）は、どのように展開したのだろうか。ここで無視できないのは、彼らの発表媒体である。当初、彼らのための専門文芸誌のような日本語メディアは存在しなかった。後に触れる詩人・内野健児は、「大正十一年頃半島には国語による詩雑誌としてはなく、各地に散在してゐる詩作者は色々の雑誌の一隅にその作品を送り込んでゐた」と回想している<sup>3</sup>。彼らの作品は、「内地」の文芸誌や、現地で刊行された日本語新聞・雑誌の文芸欄に投稿されたのである。

ここで、朝鮮で刊行された日本語新聞・雑誌の意味について考えたい。海外日本語新聞に関する蛭原八郎の研究によれば、「韓国に於ける在留日本人の人口は、開港後は僅々二三千人であつたが、明治二十年頃は五六千を算へ、日清戦争後は一万を超え、日露戦争後は三四万に達した」という<sup>4</sup>。日本人移住は1876年日韓修好条規に基づく釜山開港に始まり、80年には首都・漢城（ソウル）に日本公使館が設置、83年には仁川が開港され、一般日本人の居住が開始された。1906年には統監府設置と併行して移住者が増加し、1910年韓国併合直後には既に17万人以上の日本人が居住していた<sup>5</sup>。

注目したいのは、蛭原が「此間同地で発行された邦字の新聞雑誌の数は大凡四五十種であつた」と述べているように、日本人移住者が活潑に日本語新聞・雑誌を刊行したことである<sup>6</sup>。その出版活動の動機はどこにあったのだろうか。蛭原が「我国人にも、当嵌る節が多い」として引用している、アメリカ移民新聞に関する研究書 Robert E. Park "The Immigrant Press and Its Control"(1922)の一節を、蛭原の著から再引用する。

外字新聞の存在理由としては[……]母語で意志発表をせんとする極めて自然な欲求を満足せしめるという点において、それが移民にとって価値づけられてゐる。[……]殆どの移民達にとっては、彼等の故国語は何時になつても依然として彼等の母語である。よし仮令彼等が我々の言語の慣用語を憶え込んで、それが彼等にとって新しい聯想と記憶の倉庫とならうとも、それ以前の記憶はそれ以前の言語に結ばれてゐるのである。

もちろん海外移民の場合が、現地の言語に溶け込むことを求められたのに対して、植民地では移住者側の「母語」である日本語が、「国語」という公用語として強制されたという背景を無視できない。しかし植民地化以前から、移住者は日本語のコミュニティを形成していた。恐らく雑誌・新聞などの日本語メディアは、言語・文化の異なる移住先の土地に、日本語によるコミュニケーションの場を作り出し、日本人同士の結束を固めるという役割を果たしていたと考えられる。

ではそれらのメディアに掲載された文学は、どのような特徴を持っていたのだろうか。日本人移住者による文学を「渡韓文学」という観点から捉える許錫<sup>7</sup>は、創作主体・作品内容・発表媒体の三点から次のように定義している。

渡韓文学は[……]第一に創作の主体の作家が移住した日本人であること、第二にその作品の内容が移住日本人の韓国における生の様子を形象化したものであること、第三にその作品が韓国で発行・発刊された新聞や雑誌に載せられたものであること<sup>7</sup>

「渡韓文学」とは、日本人移住者が渡航や移住先で

の生活などを主題とした文学作品である。許の指摘に付け加えれば、「形象化」された個々の経験は、現地の日本語メディアを通じて、他の移住者と共有されたのではないだろうか。この特徴は、後に見るように、移住者自身によって編まれた朝鮮を主題とする短歌・俳句のアンソロジーで顕著である。

また許錫は「駐在国での文学作品を日本語に翻訳・紹介し、日本の読者達に発信する所謂両国文学における媒介としての役割をはたしていた」点に注目している<sup>8</sup>。これは小説・詩には見られることだが、管見では短歌・俳句の場合には、むしろ「駐在国」つまり朝鮮人作者による日本語の歌作・句作の方が多。その理由については今後検討が必要だが、身近に触れえる日本語の文学作品として、短歌・俳句が多かったということも考えられるのではないだろうか。

そして日本人移住者は、自分達の作品の中に朝鮮という土地固有の特色を盛り込もうとした。「朝鮮色」「地方色」の提唱がそれである。彼らの目で描かれた文学は、「内地」の文学にはない独自性を持つとされた。ただし「朝鮮色」「地方色」の主張が、結果的に朝鮮イメージの固定化につながってしまったことも確かである。

本稿では、まず日本人移住者文学に関する資料の現況報告として、韓国国立中央図書館蔵書の特徴について述べる。次に、同館所蔵資料に基づいて移住者文学の一端とその特質を論じ、最後に彼らの作品が、朝鮮の人々をどのように表象したかについて、「白衣」というモチーフの描かれ方から検討したい。

### 3 韓国国立中央図書館蔵書の特徴

韓国国立中央図書館（以下「国立中央図書館」と略記）は1945年国立図書館として開館、63年国立中央図書館と改称し現在に至っている。その蔵書の特徴として、朝鮮総督府図書館（以下「総督府図書館」と略記）の蔵書を継承しており、戦前期韓国で流通していた日本語書籍を大量に所蔵している点が挙げられる。

国立中央図書館は資料のデジタル化と公開を進めており、「デジタルライブラリー」で検索・閲覧が可

能である<sup>9</sup>。この内、旧総督府図書館の日本語書籍は、「日本語資料（～1945）」（87,521冊）、「韓国関連外国語資料（1945年以前）」（12,731冊）に含まれている。前者は一般書籍であり、朝鮮に関連する資料は後者に一括されている。この構成は、総督府図書館時代の分類に基づくものである。

1923年11月に官制公布された総督府図書館は総督府に直属する教化機関であり、その目的は「1 特に朝鮮統治の主義方針に基づく思想の善導、教育の普及、産業の振興に関する新旧の参考図書を取りそろえること。／2 朝鮮民族の文献を収集すること。／3 広義の朝鮮研究に関する和漢洋書を収集すること。／4 朝鮮全土への図書館の普及発達をはかつて、その指導者になること」にあった<sup>10</sup>。つまり植民地統治に必要な情報の収集と民衆への宣伝・教化が主な役割であった<sup>11</sup>。このような「植民地図書館」としての役割は、その蔵書の構成や分類にも影響することとなった。その特徴を端的に表しているのが、他の図書館に見られない「朝鮮門」という分類だった。

朝鮮総督府図書館『昭和十二年一月一日現在 新書部分類目録』（朝鮮総督府図書館 1937年3月30日）<sup>12</sup>の冒頭に付された館長・荻山秀雄の「序」によれば、「朝鮮門」は「本館の特色を濃厚に発揮させるために設けた」ものであり、「朝鮮の文献は勿論朝鮮と密接不離一如の関係にある満洲・蒙古・西伯利亞の図書をも包含させた相当広範囲」の資料を含む点に特質があった。この部門に対する荻山の期待は大きく、「この部門だけは東西古今に亘り博搜の手を尽して将来国際的の権威をもたせたいとの気魄と熱意とを以て一路邁進してゐる」のであり、将来は「朝鮮門」資料だけを単独に目録化した『朝鮮部門総合図書目録』を作成し、「東亜研究者に特別の便益を図る」ことにしたいと述べている。

つまり朝鮮に関する資料を一局的に収集したのが、総督府図書館「朝鮮門」の内容だった。ここに分類された資料は、「朝」という門を表す記号と数字2桁の細目番号からなる請求記号を付された。この内40番代が語学・文学に関する書籍である。「朝鮮門」の分類基準は、特に明文化されていないが、目録から見ると限りでは、表題が朝鮮に関係するものや、発行所が朝鮮であるものなどが選ばれたようである。た

だし内容が朝鮮関連の書籍でも、発行地が東京であれば一般の文学(第5門)に分類されている場合がある。当時の請求記号は現在でも用いられており、これに基づいて当時の所蔵状況を推定することができる。

以上のように、国立中央図書館には総督府図書館「朝鮮門」の蔵書が元の分類で含まれていること、その特殊な分類はかつての植民地支配に必要な資料収集・思想監視・民衆教化といった「植民地図書館」の役割に応じたものであるということが明らかになった。

注目したいのは、この「朝鮮門」に現地で発行された文学書も含まれていたことである。これは朝鮮の風土・文化・歴史・地理を題材とした作品が多いからであり、文学書もまた朝鮮関連資料として位置づけられていたからだと考えられる。ではこれらの文学の担い手は、どのような意識で創作活動を行っていたのだろうか。

#### 4 日本人移住者文学と「朝鮮色」「地方色」

国立中央図書館に所蔵されている日本人移住者の手による文学書の中で、特に多いのが短歌・俳句・詩・川柳などの短詩型文学に関するものである<sup>13</sup>。これらの資料から、特に短歌に焦点を当て、その文学活動の一端を探ってみたい。

歌集『韓郷』(真人社 1931年2月9日)の著者・市山盛雄は、1922年日本醤油株式会社奉天出張所から京城出張所へ転任、1923年7月短歌結社・真人社を創設し、短歌雑誌『真人』を創刊した<sup>14</sup>。本書は同誌に掲載された作品を中心に、1922年から30年までの歌作を収録しており、本人が述べるように、一渡韓者の約8年間にわたる「生活記録」(「後記」)になっている。

例えば「大正十一年」の章は、「玄海を越ゆ」という歌題で始まり、「朝靄のうすらぎゆけば遠島の岩にましろく潮あがる見ゆ」といった渡航時の感慨を詠んだ歌が置かれている。また、同じく朝鮮に渡航してきた弟を失った時には、「くれてゆく異国の山の山陰につめたくなりて汝はゐるべし」(「栄太郎」と、「異国」にある心細さを、弟の死に託して述懐してい

る。しかしその後結婚・子の誕生などの変遷を経て、「から国のさびしき旅にゆきくれているのちはつとも悔ひざらむわれは」(「曙光」という境地に至る。この歌では、不安定な移住生活を「さびしき旅」に例えているが、同時に「から国」で生涯を終えても「悔ひざらむ」という諦念の入り交じった覚悟も示されている。このように移住者としての自己を受け容れた上に歌を作る態度は、「自分にとって朝鮮は第二の故郷であり、この本に収めた歌の背景でもある」(「後記」という言葉からも窺われる。

市山の歌集は、文学作品として見た場合、突出した表現を持つものではない。しかし注目したいのは、渡航や近親者の死や婚姻・子の誕生など、人生の転機の記事として歌作が行われていること、そこから当時の一般的な日本人移住者の生活相や心情が窺い知れるということである。

また、このような歌作行為が、個人の心情の発露に留まらず、各地に在住する日本人を結びつける役割を果たしたことも指摘しておきたい。例えば渡辺清房編『歌集 松涛園』(元山・元山短歌会 1928年12月20日)は、朝鮮の地方歌壇が全体の組織へと統合される経緯をよく示している。元山は1880年開港され、いち早く日本人居留地が設けられた都市である。1914年には京城府と元山府を繋ぐ京元線が開通し、中央との連絡が緊密になった。同書によれば、元山短歌会の前身は1919年開かれた歌会「あしかび会」であり、1927年に元山短歌会が設立、また前述した真人社の支社が創立された。同年以降、若山牧水・市山盛雄・尾上柴舟ら著名歌人が来訪することになる。つまり、このような歌会や結社活動を通して、朝鮮各地に在住する日本人のコミュニティが結成されたのである。

彼らの作品は、やがて歌集にまとめられていくが、そこにはどのような編纂意識が働いているだろうか。例えば市山が編纂した『朝鮮風土歌集』(真人社 1935年1月1日)は、「朝鮮現住歌人過去在住歌人、旅行者、朝鮮に関係を持つ歌人等の作品より朝鮮色の出たるものを念とし一党一派に偏することなく有名無名を問はず採録範囲を広汎にした」という網羅的な歌集である(「凡例」)。「朝鮮色」の重視という姿勢は、各歌を「風土、植物、動物、各道別、雑等

に分類」し、また巻末に「朝鮮地方色語解註」を掲載するという本書の構成によく表れている。

ではここで想定されていた「朝鮮色」とは、具体的にどのような内容を指すのだろうか。本書前半の「風土篇」では、「赭土」「温突」「長煙管」「火田民」など、典型的な朝鮮イメージを喚起する景物に沿って各歌が配列されている。また後半の地域篇では各地の名所旧跡を歌った作品が挙げられている。注目したいのは、本書の主題とする「朝鮮色」が、外部の旅行者等の期待するイメージとかけ離れていないという点である。「自ら朝鮮名所古蹟案内ともなる」（「凡例」）と述べているように、この歌集は「朝鮮色」を求める読者の期待に応じる形で編まれている。巻頭に掲げられた「内地」の歌人・川田順の「序」は、このような受容態度を明らかにしている。

朝鮮の風土は京城を初め何れの地も好ましく、日本内地とは頗る趣を異にしてゐる。[……]此の種の歌集はローカル・カラーがしんみりと現れてゐないと、無意義であると予は思ふ。[……]秀れた風土詠はその国に永く住むか、幾回もその地を旅した者でなくては出来難い。通りがかり位では秀れた作歌は中々むづかしいであらう。／今度の歌集にも、朝鮮在住諸君の歌が多く入ることと思ふが、予の期待する異国情調がにじみ出てゐるものであることを切望する。

朝鮮在住歌人の独自性は、「風土詠」に現れた「ローカル・カラー」（「朝鮮色」）によって、読者の「異国情調」への期待を満たす所にあるとされた。そこで求められるのは、あくまで「日本内地」の「風土」との対照において際立つような特色である。しかし同時に「朝鮮色」は、在住歌人自身の文学を価値づける際にも強調された。

真人社の歌集・道久良<sup>みちひさりょう</sup>編『歌集朝鮮 第一輯』（京城・真人社 1937年3月31日）は、「朝鮮の自然と人間への限りなき愛から朝鮮の歌は生れ出ねばならない」と、移住者という立場に重点を置き、「たゞ朝鮮に住み、そこで歌つたものだといふ点に一致した唯一の性質がある」（「歌集朝鮮に就て」）としている。歌作において作者の立場を重視する基準は、本書の編集方針にも反映されている。この歌集は「作者といふものを全然抜きにして、たゞ作品の題と、内容

の持つ気分だけを取り出し」て配列した所に特徴があるが、興味深いのは、編者が歌集全体を一つの「総合詩」と見なしている点である。

この歌集は、朝鮮を主題とした一篇の総合詩たらむべく編まれたものである。それ故、古代朝鮮、近代朝鮮、また土地によつて異なる風物の変化、人の生活、或はまた、こゝに移り来て間もない若き女性の持つ抒情詩の世界の如き、それらのあらゆるものを含めて、現代朝鮮を現はすべくこの集は編まれてゐる。（同）

編者によれば、歌集全体を統一するのは、「朝鮮に住み、そこで歌つた」という歌作の場の共通性である。朝鮮居住者であれば同一の「気分」を共有し、従つて個々の作者を越えて一つの作品として考えることができる、とされたのである。

以上のように、朝鮮で編纂された歌集において「地方色」「朝鮮色」は、「内地」の人間と異なる、移住者独自の心性を表現したのものとして重視されていたことが分かる。これらの要素は、移住者の文学コミュニティの中で、相互に感情移入し合う媒介物の役割を果たしたのではないだろうか。そしてそのような形で移住者の集団的アイデンティティを強化していったのではないだろうか。

朝鮮在住の俳人・北川左人<sup>きたがわすけひと</sup>による『朝鮮固有色辞典』（京城・ウサギ文庫蔵版 青壺発行所 1932年12月26日 再版1933年1月20日）は、「朝鮮における凡ゆる固有色——郷土色、地方色——を明確に展示する」という目的で編纂されたものである。インデックスにまとめることで、それらを組み込んだ歌作・句作が容易になり、「朝鮮色」が規範化されていったと考えられる。

## 5 「朝鮮色」における「白衣」というモチーフ

「朝鮮色」「地方色」が重視されたのは、歌壇・俳壇など文学の分野だけではなく、例えば朝鮮総督府の主催で1922年から43年まで毎年1回開催された朝鮮美術展覧会では、審査の際に作中に現れた「朝鮮色」が重視された。

「朝鮮色」とは、帝国日本の地方としての植民地

朝鮮の「朝鮮らしさ」を指すことばで、「朝鮮郷土色」と「朝鮮地方色」も同じ意味を持つ。鮮展を扱った記事や入選作に対する評文でも、「内地＝中央・日本」の「外地＝地方」として「朝鮮の色」と「朝鮮的なもの」を持つ植民地・朝鮮のイメージを描くことが奨励された<sup>15</sup>。

同展覧会は、日本人・朝鮮人ともに6ヶ月以上朝鮮に居住していることが出品資格だったが、審査員はほとんど日本人で占められていた<sup>16</sup>。ここから、「内地」から来た日本人審査員と出品者の間で、「朝鮮色」をめぐる解釈の齟齬が生まれた。

例えば第十回展（1931年）の第一部（東洋画之部）の審査員を務めた川崎小虎は、朝鮮の「作家の作品はどれも模倣が多いとのことであるが、自分が今日車中で見た処によればとても題材にしたい光景がある。この点をねらって製作すれば朝鮮独特の作が生まれる事でしょう<sup>17</sup>」と談話している。事実、彼は同年の第十二回帝展で《荒涼》（図1）を出品している。後年の回想では、

私は朝鮮へ三度、満洲、北支、蒙古等に旅行をしたが彼地の貧しい生活や荒れ果てた風物に深い感動を覚えた。／この絵は慶州でフト見かけた写生の一こまである。市場へ野菜を出荷した帰途、小馬に寄りそって一休みする少年。一木もない黄土色に枯れた山河を眺めて言い知れぬ悲哀を想っているようである。私はこのような淋しい土地の情景に、郷愁を持っている<sup>18</sup>。

と製作動機について語っている。しかし、このような「内地」の画家が一方的に思い描いた朝鮮イメージは、在住日本人画家の激しく否定するものだった。座談会「鮮展を語って半島美術界に及ぶ」（『京城日報』朝刊1931年5月10日）では、

三木弘（洋画部）：僕はローカルカラーといふことに就ては、大体朝鮮に旅行して来るいはゆる大家が置土産的に型の如くにローカルカラーの強制をする感じがするね。[……] あの人達の書いたものを見ると旅行者の一つのエキゾチックな感じを以ていふてある。[……] ローカルカラーといふのは朝鮮の妓生とか、古い寺の門とかお宮とかいつたやうなものでないとローカルカラーがないものだと思つてらしい。[……]

村上美里（洋画部）：朝鮮に一遍でも在住して生活して居る人は朝鮮といふ気持ちにおいてすでに違ふと思ふね。今更改めてローカルカラーといふやうな表現をしなくとも[……] 一つの水を描き、空を描いても、そこにはすでに内地では見られない色彩を充分に見られやしないかと思ふがね。

と「旅行者」の立場から作り出された、「型」のような「地方色」を批判し、居住者の目に映った風物にこそ独自の「色彩」があるとした。このように文学だけでなく、美術でも「朝鮮色」「地方色」は、朝鮮での日本人の芸術活動を価値づける要素として重視された。

ここで注目したいのは、前掲《荒涼》で驢馬と共に朝鮮の少年が描かれている点である。本稿で論じてきた「朝鮮色」「地方色」は、旅行者・移住者の違いはあるものの、共に日本人の立場で唱えられて来たものだった。では、その中で朝鮮人はどのように表象されたのだろうか。《荒涼》では、緑のない黄土色の大地と共に、少年の髪型や服装が、「朝鮮色」を示す指標となっている。ここで描かれている「白衣」は、朝鮮の伝統的な衣裳として、文学・美術から写真・絵はがきなど様々な分野で、日本人によってモチーフとされてきた。

例えば朝鮮総督府編『写真帖朝鮮』（1921年10月25日）では、「服装の変遷（足から）」というキャプションが付されている（図2）。「白衣」は、古い慣習の代表として、足元の洋靴と対比されている。この写真が暗示するのは、近代化による社会の「変遷」の結果、朝鮮の生活習慣が衰退して行くだろうというメッセージである。『写真帖朝鮮』は、巻末に年々増加する産業率・教育の普及などを図表で示し、総督府による近代化政策を正当化するものとなっている。

では日本人移住者の文学で、この主題はどのように描かれているだろうか。前掲『朝鮮風土歌集』では、「白衣の人」という歌題で、「白き衣まとひしここの国人のわが眼にしみて寒々しけれ」（丘草之介）、「朝ぎりの街をゆきつつこの国の白衣かなしとわれはみにけり」（前田勝正）、「国々のふりのゆかしきここに来て白衣の人のすがしきをみつ」（若山喜志子）などが挙げられている。印象は作者によって異なるが、共通して「この国人」「この国の白衣」「白衣の人」

という見られる対象と、「わが眼」「われはみにけり」「みつ」など見る主体との距離が明確にされている。つまり「白衣」は、日本人と朝鮮人の距たりを意識させる景物となっている。権錫永クォンソクヨンによれば、それまで朝鮮人の「日常」に属してきた「白衣」を着る」という行為は、日本人の視線を受けることで、特殊な意味を担うようになったという。

門戸開放（一八七六年）後、外なる他者たちに眼差され、解釈されることによって、白衣の日常性はまもなく破壊された。つまり、もはやその社会にさりげなく存在しうるものではなくなったのである。社会における白衣の安定性は失われ、白衣は、解釈・表象をめぐる闘争の〈場〉としての性格を帯びていく<sup>19</sup>。

渡航してきた日本人にとって、「白衣」は「朝鮮の風景」を意味すると共に、「有徴化された朝鮮人の様々な〈特徴〉を包み込んだもの、言い換えれば朝鮮人の表象」となった（同）。つまり、朝鮮人／日本人という自他の違いを、目に見える形で示す記号となったのである。

しかし日本人移住者文学の中には、「白衣」を単なる他者性の表現に留めていない作品も存在する。ここで詩の分野に目を転じてみたい。取り上げるのは、詩人・内野健児（1899-1944）の作品である。内野は長崎県対馬に生まれ、1921年から28年まで朝鮮で教員として生活、一方で日本人移住者による詩壇の形成に尽力した<sup>20</sup>。

彼の活動を支えたのは、「朝鮮独特の内容を表現したい、内地の詩人が内地に於て生産する作品とは別種のを創造したい」という希望であり、彼自身の作品も「ローカル・カラーをめざす傾向が強かつた」<sup>21</sup>。また自作を「郷土文学」としての「朝鮮詩」とも表現している<sup>22</sup>。彼は、朝鮮を「郷土」とする日本人移住者の文学を確立することが重要だと考えていた。

このような彼の活動は、今まで論じてきた歌人達とも共通する。内野の特徴は、朝鮮人の生活や心情を積極的に理解しようとする傾向が見られる点である。そこで彼の作品における「白衣」表象の変化を、発表順に辿ることで考察したい。

最初期の作品「白衣讃章」（『耕人』1922年6月）では、「白衣」が朝鮮人の日常着として、明るい肯定的なイ

メージで描かれる。

燦々たる野の春光に／白衣ひらめかして／鋤を振ふ彼等〔……〕白衣は彼等の労働服であり／且つまた彼等の礼服である／あゝ清浄なる雪白の衣服！／／きらびやかなる粉飾を追はず／土に生れて土に生きむとする／彼等はどこまでも自然の子である〔……〕故に、彼等は束縛を忌み／どこまでも解放されたる自由を欲する／自由は彼等の生命である！〔……〕徒らに文明の利器の騷擾の中に／朝鮮の伝統を破壊し終ることなく／彼等自然の生命をして伸ばしめよ

ここでの「白衣」は、人々の「自然の生命」を象徴する。一見、これは『写真帖朝鮮』の否定的なイメージと異なるように思われる。しかし、作中で「文明の利器」と「朝鮮の伝統」が対比されていることから分かるように、肯定的なイメージもまた、「文明」＝近代化から隔絶したものとして朝鮮を位置づける点では同様である。

このように、初期の作品では朝鮮人に接近しようとする意図がありながら、内野自身の理想像の投影に終わっているものが多い。しかし、後期になると、「白衣」の明朗なイメージばかりではなくなる。特に注目したいのが、「李王薨去——桜、花咲く四月二十六日は、午前六時十分こときれ給ふ——」（『朝鮮芸術雑誌 朝』1926年6月）である。

白衣白衣白衣白衣白衣白衣白衣白衣白衣白衣  
.....

しらじらと、しらじらと  
敦化門にひた寄せる波のむれ  
あいごをうあいごををうをうをうをうをう  
.....

やるせない唸りは  
渦巻いてせまる！

鈍色の昌徳宮——

かきにごされた大空の胸に  
しぶく桜の群葩も蒼ざめはてゝ

あいごをうあいいごををうをうをうをう  
 .....

重々しい心は压榨されて  
 里から洞から——鐘路へ敦化門へ

白衣白衣白衣白衣白衣白衣白衣白衣白衣白衣  
 .....

この作品では、まず活字の羅列が視覚に訴えかけてくる。他の詩と異なり、「白衣」が風景の一部として点描されるのではなく、「波のむれ」として読者の目に迫ってくる印象を与える。同様に繰り返される「をうをう」という音声も、「やるせない唸り」や「压榨」された「重々しい心」の表現として捉えられる。

ではこの詩は、どのような場面を描いたものだろうか。「李王」とは、題名が示すように、1926年4月26日に死去した李朝最後の皇帝・純宗を指し、彼の死を悼んで昌徳宮前に集まってきた人々の姿が、この詩のモチーフである。当時の新聞報道では、「朝鮮内においては、発表の日より三ヶ月間王殿下に弔意を表すべく白衣白笠を着用することゝなつた<sup>23</sup>」が、それから間もなく「この群集に紛れて不穏なる言動をなす」危険性を理由に、総督府は国葬当日まで宮殿前での「哀号」を禁じている<sup>24</sup>。

以上から分かるのは、この詩が、人々の「哀号」という行動の、より奥底にある動機を想像する形で成り立っていることである。作者はそこに、植民地支配の「压榨」に対する朝鮮人の「やるせない」心情を読み取った。その心情を、押し寄せる「白衣」のイメージに具象化し、この詩の読者に伝えようとした。つまり「白衣」は、朝鮮人／日本人という自他の違いを強調する表現でなく、朝鮮人の感情を理解する手段として用いられている。

## おわりに

本稿では、植民地期韓国における日本人移住者の文学コミュニティが、どのような社会的意味を持って形成されたのか、具体的にどのような活動を行っていたのか、その作品の特徴はどこにあったのか、

を検証した。特に日本語によるコミュニケーションの場として文学コミュニティが存在したという論点は、今後資料に基づいてより検証していく必要がある。また、「朝鮮色」「地方色」の強調についても、各芸術ジャンルの特質を踏まえて個別に分析することが求められる。



図1 川崎小虎《荒涼》(1931年)  
 東京芸術大学大学美術館蔵



(足から) 遷變の装束

図2 朝鮮総督府編『写真帖朝鮮』  
 (1921年10月25日)より「服装の変遷(足から)」



〔注釈〕

- 1 黒川創「はじめに」(黒川創編『外地』の日本語文学選1 南方・南洋／台湾』新宿書房 1996年1月31日)
- 2 黒川、前掲書。
- 3 内野健児「朝鮮に於ける詩の仕事に就て——回顧的に——」(『東洋之光』1939年11月)
- 4 蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』(復刻版 名著普及会 1980年10月20日)
- 5 高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』(岩波書店 2002年6月20日)
- 6 蛭原の著作によって韓国併合までの日本人による出版活動の概略を示せば以下のようなになる。開港地と日本人居住地の拡大に伴い、各地域で日本語出版物が刊行されていく様子が分かる。  
1876年 釜山開港  
1877年 釜山で最初の日本人学校設置  
1882年 最初の日本語新聞『朝鮮新報』(釜山)創刊  
1883年 仁川開港・漢城(ソウル)で日本人の居留開始  
1889～90年頃 新聞『朝鮮の週商報』(仁川)創刊  
1892年頃 新聞『漢城旬報』(京城)創刊・最初の日本語雑誌『鷄林』(釜山)創刊  
1898年 新聞『木浦新報』(木浦)創刊  
1899年 雑誌『漢城月報』(京城)創刊  
1905年 新聞『朝鮮』(大邱)創刊  
1906年 新聞『京城日報』(京城)創刊  
1910年 韓国併合
- 7 許錫「〈日本文学研究の多様な視点〉移(住)民文学の成立可能性とその展望——韓国の場合を中心に——」(『日本語文学』2006年9月)
- 8 許錫、前掲論文。
- 9 韓国国立中央図書館電子図書館  
<http://www.dlibrary.go.kr/JavaClient/jsp/wonmun/index.html>
- 10 河田いこひ「朝鮮の図書館」(加藤一夫・河田いこひ・東条文規『日本の植民地図書館 アジアにおける日本近代図書館史』社会評論社 2005年5月31日)
- 11 河田前掲論文によれば「日本は、台湾や中国東北部地方(満洲)の植民地化に着手すると、直ちに、それらの地の歴史、地理、文化、生活様式、慣習、経済、法制その他を徹底的に調べて、支配するための基礎資料にしてきた。朝鮮では、朝鮮総督府取調局が、この仕事を担当した。しかし、取調局は、わずか二年余りで、任務を終えたとして、一九一二年に既に閉局となった。一九二五年四月三日に、神武天皇祭に合わせて開館した朝鮮総督府図書館は、この取調局の機能を代行すべき部局でもあった」。
- 12 『書誌書目シリーズ62 旧植民地図書館所蔵目録第6巻』(ゆまに書房 2003年8月22日)
- 13 今回確認できた韓国国立中央図書館蔵書中の日本人移住者による短歌・俳句・川柳・詩の単行本は、以下の通りである。正木準彙著『朝鮮川柳』(川柳柳建寺社 1922年10月25日)、戸田雨瓢編『朝鮮俳句一万集』(朝鮮俳句同好会 1926年9月1日)、後藤郁子著『詩集午前0時』(森林社 1927年8月5日)、成田硯内著『金剛句歌詩集』(亀屋商店 1927年9月4日)、渡辺清房編『歌集松涛園』(元山短歌会 1928年12月20日)、内野健児著『詩集カチ』(宣言社 1930年4月25日)、北川左人編『朝鮮俳句選集』(青壺発行所 1930年5月20日)、江口捨次郎著『詩集なきがらを葬る』(亜細亜詩脈協会 1930年6月5日)、市山盛雄著『歌集韓郷』(真人社 1931年2月9日)、中西九十九著『朝鮮風物詩集』(中西九十九 1932年7月30日)、百瀬千尋著『歌集鍾路風景』(ポトナム社 1933年10月8日)、朝鮮歌話会編『昭和九年版朝鮮歌集』(朝鮮歌話会 1934年1月25日)、儒達短歌会同人編『儒達 昭和八年集』(儒達短歌会 1934年7月17日)、小山一徳等著『句集梨の花』(梨の花刊行会 1934年8月25日)、市山盛雄編『朝鮮風土歌集』(真人社 1935年1月1日)、磯部百三著『歌集松の実』(磯部百三先生歌集刊行会 1937年2月22日)、道久良編『歌集朝鮮第一輯』(真人社 1937年3月31日)、現代朝鮮短歌集刊行会編『現代朝鮮短歌集』(発行所・発行月日不明 1938年)、津邨兵治郎編『朝鮮風土俳詩選』(津邨連翹荘 1940年9月1日)、松村紘一著『手に手を』(詩歌集 博文書館 1943年7月30日)、佐藤信重編『平壤詩話会作品集第一輯』(朝鮮文人報国会 1944年9月5日)。
- 14 同書所収・細井魚袋「韓郷出版に就て」
- 15 金恵信『韓国近代美術研究 植民地期「朝鮮美術展覧会」にみる異文化支配と文化表象』(ブリュッケ

- 2005年1月20日)。
- 16 町田春子「朝鮮美術展覧会」(『岩波小辞典 現代韓国・朝鮮』2002年5月8日)
  - 17 「朝鮮には独特の画材あり」(『京城日報』朝刊 1931年5月17日)
  - 18 東京芸術大学編『東京芸術大学蔵品図録 絵画Ⅱ』(第一法規出版 1976年12月1日)
  - 19 権錫永「「白衣」という表象」(『日本近代文学』2001年10月)
  - 20 内野健児の活動と作品については、新井徹著作刊行委員会編『新井徹の全仕事 内野健児時代を含む抵抗の詩と評論』創樹社 1983年5月31日)を参照。
  - 21 内野健児「朝鮮に於ける詩の仕事に就て——回顧的に——」(前掲注3)
  - 22 第一詩集『土壙に描く』(耕人社 1923年10月31日)「跋」では「本詩集がいくらかの刺戟ともなつて更によりよい朝鮮詩を産み、郷土文学興隆の氣勢に些少でも資し得たとしたならば望外のうれしさである」と述べている。
  - 23 「三ヶ月間白衣白笠」(『京城日報』朝刊 1926年4月27日)。
  - 24 「哀号を夜は禁止 不穩の言動取締り」(『京城日報』夕刊 1926年4月28日)、「敦化門前の「哀号」 けふから禁止 静穩に秩序を保つ」(『京城日報』夕刊 1926年5月3日)など。